

3. 私の特別な日に

各務原市立鵜沼第二小学校

6年 石田 叶 伊美 好香 木下 莉緒
新田 裕子 山田 湖弓



敦賀市立敦賀北小学校

6年 松本 楓 河瀬 亜湖

ピピピピピーッ。

目覚ましの音で目がさめた。ねぼけながら階段をおりていく私。キッチンのテーブルの上に朝ごはんの手紙がおいてあった。

美羽へ
先に仕事に行きます。

お母さんからだ。私のご飯を食べ、歯みがきをすませた。時計を見る。

七時三十分。

いつもなら、友だちの若奈が来る時間だが、なかなか来ないので一人で学校に行くことにした。登校する小学生でいっぱいのはずの細い道が、がらんとしていて誰もいない。おかしい。そんな事は分かってる。分かってるけど考えたくない……考えられない……。そんな事を考えていたら体がふわっとした。ジェットコースターから落ちる感じだ。

そおっと目を開ける私。目の前には学校があった。誰もいない。身の毛がよだつとも言うんだらうか。いままでおさえていた気持ちがいっきにあふれだした。

「いやーっ！」

と言うところで目がさめた。冷や汗をかいた手が天井のようにのびている。

「美羽ーっ、早くしなさい！ 若奈ちゃん来てるわよー」

一階から呼んでいるはずなのに、よく聞こえるお母さんの声ではっとした。よろよろと階段をおりてキッチンにむかうと、仕事に行く前のお父さんが新聞を読んでいた。お母さんは、やはりいそがしそうにキッチンを行ったり来たりしている。いつものあたりまえの風景に、ほっとしたような変な感じがした。

「美羽、おはよ」

ぼけっとしている私に若奈が声をかける。気がつくとそのせまい道にいた。車とギリギリですれちがうくらいに小学生があふれている。

(これは……現実……?)

自分でも不思議なくらいあの夢が頭からはなれない。でも心のどこかではわかっているんだ。あの夢が本当にリアルで、現実と少しもちがわなかったことを……。

そうになると、今、私がいるこの世界はなんなのだろう？ 夢と現実。それは、ちがうようで、実はつながっているのかもしれない。そんなことばかり考えてしまった。

(先生……何をおっしゃっているのでしょうか……?)

実際に言ったワケではない。そんな事を言ったら、山谷先生の事だ。火山が噴火するに決まってる。人はふだん使っていない脳ミソを使うと、他の事が手につかないことがある。あっ、いや……山谷先生の授業がつまらないワケでは決してない。つまり、他の事を考えていると、授業が耳に入らないと言うか……。まあ、そんな感じで、大好きな音楽があったにもかかわらず、五時間中四時間の授業が小川の水のように右の耳から左の耳へ、さらさらと流れていった。

さて、給食を食べ終え、自由時間だ。いつもは若奈と図書館ですごすので、教室を見渡した。

「あれ？ 若……」

そう言いかけた時だ。

「美一羽っ」

うしろからポンッとかたをたたかれた。ふりむかなくても分かる。若奈だ。

「あ……若奈。図書館行こ」

「うん、いいよ。あっ美羽、今日アレでしょ？ 美羽んちでやりたいと思うんだけど、いい？」

「アレ……？」

アレとは何だろう……何か大切な事を忘れていた気がしてきた。

「あはは!! 美羽ったら、自分のアレ忘れたなんて言わないでよー？」

いや……そもそもみんな外に行って誰もいないんだから、アレとか言わなくてもいいと思うんだけど……。

まあそんな私の思いが届くはずもなく、若奈は話し続けた。

「じゃあ、美羽んち集合ってことで!! あ……優君さそってもいいよね!？」

若奈は井ノ上優の事が好きだ。でも、友だちをさそってもいいアレとはなんのことだろう……？

「あの、若奈ー」

……なんと言うことだろう。彼の名前を口にするとたん、若奈はルンルン気分ですでに外に行ってしまうていたのだ。

今日って、六月十五日？

五時間目が終わり、帰りの会をすませたみんなは、そろそろと教室を出ていく。その中で私はポツンと自分の席にすわっていた。

「あ……れ……？」

周りには、もう誰もいなかった。

頭の中をぐるぐる回っているのは、あの夢。

——バンッ。

勢いよく学校をとび出した。一人はイヤ、みんなおいていかないで!! そんなふうにはさげびたい気分だ。家に向かって必死に走った。

(あと少し……あと少し!!)

家の前まで来ると、気がぬけて足がもつれた。げんかんのドアを開けて急いでリビングにむかった。

「お母さんっ!! お父さん!!」

仕事でいないはずのお父さんの名前も呼んだ。なぜか今日は家にいる……そう思った。その時、私は思い出した。

今日は六月十五日。私の特別な日——。 ★

「ただいま」

「お帰り美羽。どうしたの、そんな怖い顔して」

「べつに。今日、若奈と優君が遊びに来るから。二人が来たら、すぐに呼んで」

と言いながら、足早に二階に上がった。帰る途中で今日のことを思い出したとたん、が然張り切ってきた。だって、今日は、六月十五日。私にとって特別な日。二年前の若奈との約束を果たす日。そう思いながら、机に向かい、二人が来る前に宿題をしながら待つことにした。

“ピン、ポーン”

若奈と優君は、どかどかと二階に上がってきた。そうして、私たち三人は、お母さんと五時までの約束をして出かけることにした。

「行ってきます」

私と若奈と優君とで、近くの公園に行った。誰も人がいない。おかしいな。いつもはもっとたくさんいるはずなのに……。気にしないようにして遊び始めた。若奈は、優君も一緒にとてもうれしそうだ。そのうち、優君は、習い事で先に帰った。

残った私と若奈は、少し静かになった。すると、突然、若奈は、私の手をぐいぐい引っぱって公園の裏の空き地に連れて行った。

「これ、美羽へのプレゼント」

中をのぞきこむと、かわいらしい机と椅子、本棚にクローゼットまであった。

「何、これ、何なの」

「何言ってんの。今日は、美羽の誕生日だから、秘密基地のプレゼント。私と美羽の二人だけの秘密だよ」

若奈はうれしそうに言った。そうか、自分の誕生日まで忘れていたとは、私どうかしている。朝からどうも変だ。

私は、大げさに喜んだ。誕生日プレゼントに秘密基地をもらったのは、初めてだ。そして、私と若奈は、約束をした。

「二人だけの秘密」

「あっ、いけない、もう五時だ」

二人は、慌てて解散した。

「ただいま」

「おかえり、何だか、美羽、楽しそうね」

私は、何事もなかったかのように、二階にある自分の部屋に上がった。何だかうれしかった。あと七時間で私の誕生日が終わる。ふっとそんなことも考えた。それにしても、変な一日。自分の誕生日を忘れていた一日なんて初めてだ。

次の日は、振り替え休日で学校は休み。私は、若奈に電話した。そして、あの秘密基地で待ち合わせをした。一時。秘密基地へ行こうとしたら、優君がいた。

「優君」

「おお、松河（松河は美羽の名字）」

優君に誰と遊ぶか聞かれた。私は、若奈と言った。次に、どこで遊ぶか聞かれた。困る。秘密基地と言ったら、二人の秘密でなくなってしまう。でも待てよ。若奈は、優君のこと好きだよ。じゃあ、教えても怒られないよね。よし、じゃあ、言っちゃえ。

「んーんとね。秘密基地」

私は、若奈に秘密で優君を連れて公園に向かった。若奈は、随分と待ったのか、しゃがみこんでいた。

「若奈ー」

そう呼ぶと、若奈はうれしそうにこっちを見た。でも、私の後ろに優君がいるのに気づくと、ものすごく怒って、私の腕を思いっきりつかんで、公園の入口に連れて行った。

「まさか、美羽、優君に秘密基地のこと言ったの？」

私は、しゃべったと言った。

「なんで、私と美羽の二人だけの秘密基地だよ。何でしゃべっちゃうの？」

若奈が涙目ですごく怒ってきた。

「ちがうよ。若奈。優君のこと好きなんですよ。だから喜ぶと思って」

私は、必死で言い訳をした。

「冗談じゃないよ。好きでも約束破られたらうれしくないよ。お礼なんかいないから、秘密にしてほしかった。美羽なんか知らない」

若奈は、泣きながら家に帰った。今まで、若奈とは、けんかをしたことがない。でも、目の前の若奈はひどく怒っている。何か変だ。私は、突然、悲しくなった。と思いきや、イライラしてきた。私、悪いことした？ 分かんない、分かんないよお。

次の日。いつもなら迎えに来る若奈も今日は来ない。イライラしていたのに、また急に悲しくなってきた。学校に行くと、若奈は、優君と話していた。

「何話しているの」

私が聞いたら、若奈は知らないと言って廊下に出た。優君に聞いたら、

「本瀬（若奈の名字）が、何かお前のこと話してたぞ」

私は何だろうと考えながら、一日を過ごした。帰ろうとしたとき、下駄箱に手紙があった。

美羽へ

三時三十分にあの秘密基地に来て

若奈より

私は驚いた。

ちゃんと三時三十分秘密基地に行った。若奈がいた。悲しそうな目でこっちを見る。そうして、私に何かを差し出した。きれいなリボンでラッピングがしてある。開けてみるといちごのケーキの形をした消しゴムだった。

「秘密基地のことは、許してあげる。誕生日に好きな子とけんかなんていやだよ。誕生日おめでとう」

私は思ってもみなかった。若奈が私に謝ってくれた。うれしい気持ちでいっぱいにな

った。でも、なんでまた誕生日プレゼントなの？ wプレゼントに舞い上がった。とこの時、玄関で、

“ピン、ポーン” と音がした。

「美羽ーっ、早くしなさい。若奈ちゃんと優君が来たわよ」

「あっ、いけなあい。宿題の途中で寝てしまったんだ」

私は、眠い目をこすった。そうして、両手でパチンとほっぺたをたたいた。よし、今日は、私の特別な日。その特別な日に、秘密基地を作る約束をしてたんだ。それにしても、若奈、二年前の誕生日の約束、よくおぼえてくれていたなあ。

「はあい」

大きな返事をして一階に駆け下りた。あーっ、夢でよかった。私は若奈の手をぎゅっと握り、三人で公園に直行した。